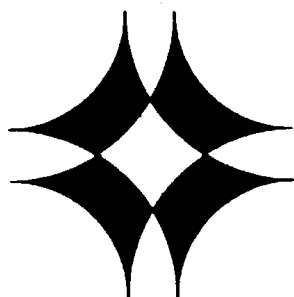


岩 野 泡 鳴

—「五部作」の世界—

伴 悦



国文学研究叢書

明治書院

著者略歴

伴 悦(ばん・えつ)

昭和5年 長野県松本市に生まる

昭和31年 早稲田大学大学院文学研究

文学専攻)修士課程修了

現在 龍谷大学教授・大谷大学講師

住所 (大阪)枚方市枚方元町4-60

(東京)小平市花小金井南町3-

主要論文

「横光利一」(『文学者』昭37.7)

「平林初之輔論」(『プロレタリア文学

賀書店)

「立原道造」(『転換期の詩人たち』芳

「得能ものの考察」(『伊藤整研究』三

『岩野泡鳴論』(双文社出版)

「正宗白鳥試論」(『龍谷紀要』昭55.11

◆ 国文学研究叢書

■ 岩野泡鳴—「五部作」の世界—

定価 2,400円

昭和57年3月15日 印刷

昭和57年3月20日 発行

著者 伴 悦

発行者 株式会社明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 株式会社柳沢印刷

代表者 柳沢一郎

製本所 正文社

■ 発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101

電話 東京 (03)292-3741(代)

振替口座 東京 3-4991番

©1982 Etsu Ban 3981-24933-8305

目 次

「泡鳴五部作」の成立過程	3
放浪——『放浪』を作った実感と所信と	5
断橋——北海道巡歴の意味	23
憑き物——「門」「行人」「ころろ」(漱石)との対比	33
発展——「生」(花袋)、「家」(藤村)との対比	61
毒薬を飲む女——「五部作」は果して私小説か	91
*	
岩野泡鳴年譜	123
五部作参考文献	147
校異——「断橋」「憑き物」「発展」	155
あとがき	201

岩
野
泡
鳴——「五部作」の世界——

「泡鳴五部作」の成立過程

「五部作」の成立過程がかなり複雑であるので、それについてはじめにまとめておきたい。『憑き物』の後半部に入る「川本氏」が、明治四十三年一月に発表され、これが全体のなかで一番早い。最後に発表されたのが、「憑き物」で大正七年五月。五部作最初の構想に入れられていた「耽溺」の発表が明治四十二年二月、それ以来、つごう七編の初出五部作を統合し、添削改訂をみたのが作者没年の大正九年である。その間、十一年、泡鳴生涯の一大長編であった。

I 五部作最初の構想

「耽溺」、「発展」、「毒薬を飲む女」（推定）、「放浪」、「断橋」

II 泡鳴五部作制作発表順序

- 1 「放浪」（明治43・7、書き下ろし出版、東雲堂）
- 2 「断橋」（前篇「毎日電報」明治44・1・1～2・28、後篇「東京日日新聞」明治44・3・2～16、断続的に六十回にわたり連載）
- 3 「発展」（「大阪新報」明治44・12・15～45・3・26、百回にわたり連載。単行本『発展』明治45・7、実業之世界社、翌月発禁）
- 4 「毒薬を飲む女」（「中央公論」大正3・6）。単行本『毒薬を飲む女』（上篇、鈴木三重吉編『現代名作集、第五篇』大正3・12、下篇『同集、第八篇』大正4・2、二分冊で刊行）

5 「憑き物」(「寝雪」、「続篇寝雪」)——「新小説」 明治45・5・7、「川本氏」——「趣味」 明治43・1、「憑き物」——「新潮」 大正7・5、以上三編の補訂)

Ⅲ 泡鳴五部作叢書(新潮社版) 刊行順序、ならびに初出との主なる異同

第一編『放浪』(大正8・7)——『放浪』(初版)全体三二章のうち一章より二四章まで収録。

第二編『断橋』(大正8・9)——『放浪』(初版)二五章より三二章までが削られ、叢書『断橋』の一・五にくりこまれる。同書六のはじめに多少の改削がみられる。初出前篇、第二十四回・六の七(二月二十九日)分にかんがりの増補改訂がある。初出第二十五回・七の一(二月三十日)から第三十五回・八の五(二月十一日)分まで叢書から削除されている。この部分は独立して「お鳥の苦み」となり、『断橋』の付録として収録。第五十六回より叢書『憑き物』一章にくりこまれる。

第三編『憑き物』(大正9・5)——初出『断橋』五十六回〜六十回がはじめにくりこまれ、『寝雪』がつづく、つまり叢書六までである。「続篇寝雪」は叢書七、八、九の途中前半まで、「終篇寝雪」は九の後半より一〇、一一、一二まで、「川本氏」は一三、一四、このあと「憑き物」は一五、一六、一七、一八、一九で完結。(叢書、巻末に「憑き物補遺」が収録。)

第四編『発展』(大正9・7)——初出第九十回・二十の一(三月十四日)から以降叢書『毒薬女』へくりこまれる筈であった。

第五編『毒薬女』(叢書で改題)——構想のまま刊行完成をみていない。

Ⅳ 事件進展の順序

「発展」、「毒薬を飲む女」、「放浪」、「断橋」、「憑き物」



単行本「放浪」の表紙

放

浪

——『放浪』を作った実感と所信と——の関係——

〔梗概〕 樺太で罐詰事業に失敗した主人公田村義雄は、一文なしとなり逃げるように北海道へわたる。小樽へ着けば残余の事業回復の資金の手だてや、別の仕事に活路がひらけ、樺太のうめあわせができるかもしれないと思うのだった。さしあたっての落ちつき先はもと中学校教師仲間、明治学院の級友でもあり、現在は札幌の某女学校の国漢教師有馬勇宅である。義雄の東京の家は事業資金のため抵当に入っている。妻には家を流れないように売却し、残金で二、三年暮らすよう手紙を出してある。一方、東京にのこした愛妾お鳥から薄情を怨んだ手紙

がきたりして彼をおびやかす。そのうち、「北海実業雑誌」の主幹で独身の氷峰島田定吉の家と有馬勇の家をネグラに往復の生活がはじまる。氷峰に小遣金や薄野遊郭の上げ代まで迷惑をかけるような生活が続く。或る晩には寂寞の感にたえず自作の詩を、氷峰に読んできかせることもあった。時には生活費のうめあわせのため、氷峰から依頼された雑誌原稿を書いたりした。氷峰の発議で東都の文学者田村義雄の歓迎会がひらかれる。義雄はうれしく思いながらも、考えてみれば実業界へ

一歩足を踏みこんだ祝でもしてくれたら、もつとうれしいのにも思うのだった。

残余の事業も手のうちようもなく断念を強いられ、小樽の漁業家との協同問題もうまくいかず、食客さきの氷峰も転居の必要が生じ、義雄はもっぱら有馬家においてもらうはかなかった。有馬家に安心させるためにも原稿を書かねばと思い立ち、「中央公論」にのつた義雄への批判に対する反駁文を書きはじめる。題名は「悲痛の哲理」と決めた。時は過ぎ懸案になっていた北海道巡視も当てにならず、いよいよ追いつめられた彼は帰京を決心するようになる。頼みにした有馬夫妻にもついにアイソをつかさねた恰好で、宿なし同然となった彼は、札幌の井桁楼でなじみになった敷島(遊女)のもとへ行く。彼女の生きざまをみると、自分の主義を小さく実現しているように思えて、悲哀と苦痛とを共にできるなら、東京に帰らずに放浪をつづけてもかまわないと思うのだった。

1

「放浪」はいうまでもなく最初に手がけた長編であった。初版『放浪』巻頭の『「放浪」を作つた実感と所信と』によると、全体「七百四十枚をなほ六七十枚もかさむ勘定になつた。」とある。書いた期間は明治四十三年三月十日頃から五月二十日頃まで、おおよそ七十日間であつた。泡鳴はつづけて述べる。「作中の事件や内容のことだが、僕の既に発表した『樺太雑感』や『札幌の印象』や(以上は散文詩)『北海道の天然』なども全く這入つてしまつた。殊に『札幌の印象』は『放浪』全体を結晶させた様なものであつたのだ。今回の『放浪』には、僕の観察した樺太や北海道の若々しい天然、風俗、並に事業界を背景に出した。その背景のおもてには、一放浪者——刹那主義の実行哲理家だ——の事

業、実生活が描かれてゐる。／主人公が哲理家であるから、その特殊な人生観、日本中心の政治文明論、現代文芸界の批判なども出て来た。」内容の描写については、「徒らに平凡な、寧ろ無意義な細事の描写に終つてしまふおそれ」のある客観描写、つまり平面描写をとらないで、「思想と、現実から出る幻影」を実生活の統合体とみて、いかにして深刻に痛切に描けるかというものであった。

大体、泡鳴の理論や概念は飛躍と独断にみちているので、その中身をとりますのに苦労する。さきの引用部分についても例外ではない。今日の一般読者にとっては「札幌の印象」なる散文詩がどういうものであるかがはつきりしないかぎり、それが「放浪」全体にどのようにかかわって結晶しているかもわからないだろう。また主人公の判那主義の実行哲理家とは一体何か。それが特殊な人生観として政治文明論、現代文芸界にどのようにかわるのか。さらには思想と現実から発する幻影とはなんであるのか。といった問題が当面挙げられてくるだろう。

これらに焦点をおいて逐次考えてゆくことにしたい。が、そのまえに「放浪」を書くまでの泡鳴の生活状況を簡単にふれておこう。泡鳴の文学的出発は詩であり、それまでは第一詩集『露じも』（明治34）、第二詩集『夕潮』（明治37）、第三詩集『悲恋悲歌』（明治38）、第四詩集『闇の盃盤』（明治41）を発表しており、その間、前後して泡鳴の哲理の基盤となった第一評論集『神秘的半獣主義』（明治39）や、その発展的続編となった『新自然主義』（明治41）、それに樺太、北海道の放浪みやげとなった「悲痛の哲理」（田中喜一王堂の「岩野泡鳴氏の人生観及び芸術観を論ず」△「中央公論」明治42・9）に対する反論）

をまとめている。一方同時期、詩論・自然主義的表象主義などにふれたものや、『新体詩の作法』（明治40）を刊行している。

『夕潮』と『悲恋悲歌』を合本した『泡鳴詩集』（明治39）の出版のあと、かれは在来の浪漫主義ないし神秘的傾向から自然主義的傾向へ転移してゆく過程で、自然主義的表象詩論を展開していたのである。つまりこれは『神秘的半獣主義』以降『新自然主義』までの移行時期におこった思想の変遷であった。

前人未到の「自然主義的表象詩論」を提唱しつつあったとき、時を同じくして散文創作の時期をむかえねばならなくなっていた。もはや『新自然主義』を標榜し、藤村、花袋の先輩作家に反旗をひるがえし、評論家としてもうるさい存在になっていただけに、その創作実践として「破戒」や「蒲団」に比肩でき、できればそれをうわまわる作品が必要不可欠であった。そのための一応の回答として書かれたのが「耽溺」（明治42）一編であった。たしかにこれは泡鳴の文壇的地位をかためた作品ではあった。が、かれ自身にとって必ずしも満足のいくものではなかった。そこへもってきて、後の五部作の女主人公清水鳥のモデル増田しも江が、泡鳴の家業（父直夫の死―明治41・5・10―後、泡鳴は家督相続した）↓下宿屋に止宿しており、泡鳴としても江の関係は深まり、やがて彼は彼女を芝切通広野に困ったが、金に困り窮余の一策として下宿屋「日の出館」を抵当にして、樺太で蟹の罐詰事業にのりだす。ところが従弟小林宰作や弟巖などのいわば素人にやらせていたことや、弟の発病などで泡鳴本人が当

地に赴いたときには再起不能に陥っていた。明治四十二年七月も間近い頃である。しかし、樺太庁第一部長中川小十郎一行の巡察に加わり、露領まで踏査をしたりして、その貴重な体験が「樺太通信」や散文詩「樺太の雜感」(のち『恋のしやりかうべ』所収)にみられる佳詩をうましめた。八月十四日、事業再興の資金調達のため、北海道に渡り放浪生活に入る。以下作品「放浪」の世界へとつながるわけである。放浪生活に入る以前の生活状況は如上のようなものであった。

2

ところで利那主義の実行哲學家のみた「札幌の印象」とは一体なんであつたのか。そして「放浪」一編が、どのように政治文明論や現代文芸界などにかかわり、思想と現実から発する幻影となつて効力を發揮し得たかが問題になる。

そこでまず「札幌の印象」をみた利那主義の実行哲學家という奇妙な存在からみていきたい。この奇妙な哲學家は、すでに『神秘的半獣主義』のなかに出現する。そこで泡鳴はいふ。人間をとりまく天と地は、人間の心と共に変転流動してやまないものである。だから広いと思う宇宙には、安んずるところがないし、安んずる本体もないという運命を背負わされている(十、表象の転換——無目的)。そうした苛酷無残な運命から逃れられず「現世に苦痛があるなら、来世にもあるに相違ない」(十一、流転と生命)とみて、自己の悲痛、苦悶を自食し、流転的利那を不斷に生きなければならぬ。こう

した生を自覚したものだけが、刹那的実行哲理家なのである。「悲痛の靈」そのものになった「自我の覚醒」者こそが、文芸の慰藉に堪え得られるものとなる（十六、運命の杖―悲痛の靈）。

「文学と芸術とは、最も個人的、最も刹那的のものであつて、刻々盲転する表象的神秘界を出来るだけ偉大に、また出来るだけ深遠に活現したものでなければならぬ。」（二十一、刹那的文藝観）

刹那的実行哲理家と文藝観の關係がいかなく述べられている。「現世に苦痛があるなら、来世にもあるに相違ない」という生きかたは、まさに背教的なほどに熾烈なものである。少なくとも来世を信じて信仰を説いた内村鑑三などの世界とは無縁の世界であるといつていい。その点、当時新思想に立たんとしていた正宗白鳥の世界に通ずるものがあつた。

換言すればこの徹頭徹尾自己発展の態度は、「すべての伝習思想を打破して、大我小我論の遊戲物ではない自己その物の刹那に發揮する態度である。自己の生命以外に自然の外延はない」（諸評家の自然主義を評す）という『新自然主義』の立場に重なるものであつた。さらに『悲痛の哲理』の結論でいえば「刹那の燃焼、強烈意識、情化知力、肉靈合致の自我実現」の世界につながってゆく。

ところで「札幌の印象」は『恋のしやりかうべ』の巻末に収められた比較的長い散文詩である。佳詩の集中している「樺太の雜感」のあとを承けたものである。「札幌の印象」は「樺太の雜感」の諸詩に比して、一段と散文詩の形体を強めている。がそれだけにまた一面、中身は冗漫な印象記といった感じも否定できない。

東西南北に井桁を打ち重ねた北海の首府、札幌の市街が描かれる。赤煉瓦の道庁、農科大学、北地を睥睨する札幌ビール工場、拓殖銀行、病院、中島の遊園、停車場、遊郭……等々象徴的建物や場所が眼に入るが、内地からきた放浪者にとって、それらは珍しい価値として映らない。それよりも関心をひくものは、積雪に堪えるように造った平屋の棟つづきであったり、アカシヤ、白楊樹、アカダモの大木、イタヤもみじの繁りなどの自然の風物である。そんな風物のあいだを百姓馬子が、種々な青物と呼び売りする姿に新開地の意味を摘出し発見している。

渠、百姓馬子は 速かに 変遷する 季節を

この 静かな 蔭の多い、外国じみた 市街に 送り込む 神の 様だ。

渠の 荷に 胡瓜、甜瓜、茄子 の 多い ときは まだ 初めだが、

短かい 夏よ やがて 栗、くるみ、ココアに 変じ、

おびただしい 唐もろこし や 林檎が 甚だ 少くなると、直ぐ、

潰け大根 の 洗はれた のが 至るところ の 家根や 木々に かかる。

他方、目にとまるのは、町角にこん炉を出し、唐もろこしを焼いて売る光景である。実がぶずぶずはじけ、いい匂いが漂うかぎり札幌は、放浪者の心をなごませ親しませる。孤独の放浪に耽酔してい

るうちに、季節は移り青物売りの馬にも出会うこともなくなり、変色のおそいイタヤもみじも紅葉し、大根は女郎屋の長廊下に並ぶ。大樽に漬けられる頃、ようやく市街にも白いものが積り出す。

そして、また僕は、親しみの 深くなつた 札幌から、

舅の 好かない 婿養子の 如く 追ひ出されて しまつた――

樺太の 事業 との 連絡も 全く 絶えて――

金も 無く、寒さを よける 外套も 無く、――

東京 から 偶々 追ツかけて 来た 腐れ女 と 一緒に！

右の引用はこの詩の最後の連（九行）のうちの結末の五行である。散文「放浪」の結末を散文詩をもつて凝結させたようなものであった。

考えればこれより二年まえ、泡鳴が自然主義的表象主義を標榜したとき、「時事新報文芸週報」の記者が「岩野泡鳴の自然主義表象詩論を読む」（明治40・5）を書いたり、片上天絃も「詩歌の根本疑」（明治40・6）を書いて泡鳴の論を批判したことがあった。記者は詩が措辞や格調などの外形的技巧に疎外されて、新主義を十全にもりこむことが果して可能かを問うたものであった。たとえば藤村の「破戒」のような賛えるべき新主義の内容を、泡鳴の主張する長詩でうたうことができるかという詰

間でもあった。これに対して泡鳴はいささか応ずるところがあった。藤村の新主義が散文形式で書かれただけに、逆に「平坦」となりおもしろくない点を指摘した。が、なお自己のあるべき新形式と新主義の關係についての回答としては、やや軟弱であることをまぬがれなかった。

もちろん泡鳴の立場は「自然主義的表象詩」を書くと同じ態度で、散文を書くことができるというもので、それはかねてからの持論であった。「樺太の雜感」や「札幌の印象」はその意味で「散文的表象詩」の一つの成立として大きな意味を担っていた。のみならず「放浪」という散文のなかに溶解し一体化させ緊密度をもたらそうとした意図は明確であり、これはさきの「自然主義的表象主義」の批判に対する具体的応答でもあったのである。

3

前後するがそもそも泡鳴の唱えた「自然主義的表象主義」（詩）とはいったいなんであったのか。それについて少しふれておきたい。これはやがてかれのいう「幻影」の一件にもかかわって、重要な内容を秘めているからである。「自然主義的表象主義」とは、冒頭でもちょっとふれておいたように、いままでの神秘的ないし浪漫主義的傾向から新自然主義へ移行してゆく過程、段階で生まれた思潮である。つまり一脈をたどれば浪漫主義——自然主義的表象主義——新自然主義という発展進境経路をみることができる。